

視点

紙芝居が育てるいのちと生きる力 —三つ子の魂百まで—



埼玉東萌短期大学幼児保育学科
学科長・教授 正 司 顯 好

幼児教育における紙芝居の果たす役割について考えます。アンデルセン、グリム、イソップ等の童話は海外から入ってきた文化ですが、紙芝居は昭和5年頃、街頭紙芝居として日本で誕生しました。自転車の後ろに積んだ舞台上で水飴などを売りながら、手作りの紙芝居を空地や道端などで演じる街頭紙芝居は、当時全国的に広がりを見せていました。当時は娯楽の色彩が強いものでしたが、時代の流れの中で国策紙芝居に利用されたりもしました。やがて教育紙芝居が優れた紙芝居作家たちによって作られるようになりまし。紙芝居は、これまで約90年の歴史を持つ日本固有の児童文化財です。

紙芝居は舞台を使うことで、作品世界が舞台から放たれ現実世界へ飛び出し、観客である子ども達に共感の世界を広げていきます。絵本と違って30人や40人など大勢で楽しむのに適しています。ところが、保育者234名を対象とした紙芝居に関するアンケート調査を行ったところ、80.3% (234人中188人) の保育者が舞台を使わないで絵本と同じように手持ちで紙芝居を演じているということが明らかになりました。何故そのようなことになっているのでしょうか。その理由を調査(複数回答可)したところ、1位が「園内に舞台が無い(82人)」2位が「舞台が無くても手で持って固定すれば演じられる(67人)」という結果になりました。さらに回答内容(複数回答可)を見ると学生の時、保育者養成校で紙芝居と絵本それぞれの特性と違いについて学んだ記憶がないという保育者が44.4%(104人)と5割弱になりました。これは幼児教育の現場で紙芝居の特性が生かすことが出来ていない大きな理

由の一つであると考えられます。保育者養成校側にこれから考えていただきたい課題でもあります。

初めて紙芝居を見た海外の絵本作家たちは、強い関心と興味を示します。フランス、スペイン、ドイツ、インド、中国、韓国、ベトナム等世界各国で紙芝居の講座や研究会が開催されていますが、海外の絵本作家や編集者、研究者たちは、紙芝居の実演者に対して「今、あなた魔法をかけたでしょう！」などと驚きの声を上げます。絵本は、絵と文字が同じページに描かれ背表紙で閉じられているのに対し、紙芝居は、表が絵で、裏が文字(脚本)になっており、1枚1枚バラバラの形式になっています。紙芝居のような児童文化財は見たことがないので「是非、自分も作ってみたい」と言う海外の絵本作家も少なくないのです。

紙芝居の演じ方を学び、作品理解を深め、参加者が意見交換し交流する場として紙芝居サミットが開催されます。昨年に引き続き、文化庁、埼玉県、埼玉県教育委員会、全埼玉私立幼稚園連合会、埼玉県文化団体連合会等の後援をいただき、今年も「第22回紙芝居サミット」が開催されます。特別講師として、紙芝居「ひよこちゃん」や絵本「こぎつねコンとこだぬきポン」など生涯にわたり200点を超える作品を世に送り出している二俣英五郎先生を招いて、それぞれの作品に込められた二俣先生の思いを語っていただきます。

幼児教育の現場で保育者から子どもたちに手渡された言葉と感動は、心の財産になり生きる力につながることでしょう。紙芝居は、そこでも大きな役割を果たせる児童文化財だと考えます。